KANSAI＊OSAKA

文化力

No.115
2012/SUMMER・夏

関西から文化力
POWER OF CULTURE

関西・大阪文化力会議リポート
21世紀のアジア太平洋と関西

マハティール・ビン・モハマド 元マレーシア首相

細川護熙 元内閣総理大臣 ほか

創立30周年記念特集号

マハティール・ビン・モハマド氏

公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

関西・大阪21世紀協会

21世アジアと関

21世紀の新たな価値創出や産業競争力の鍵は、
文化にあるといわれる。
アジアの多様性のなかにあって日本は、
どのような文化戦略を選択すべきか。
そして関西が果たす役割とは何か。
1,600 人がその議論に聞き入った。

マハティール・ビン・モハマド
元マレーシア首相

細川護熙
元内閣総理大臣

公益財団法人　関西・大阪 21 世紀協会会長　**熊谷信昭**（主催者挨拶）

文化は、人々の幸せや豊かさに直結する根源的なものであると同時に、国際平和や世界の歴史を動かす力さえ持っています。これまで世界・人類に大きな影響を及ぼした国々や民族は、経済力や軍事力だけではなく、世界に冠たる学術や芸術などの文化の力を持っていました。

これは地域についてもまったく同様です。地域が繁栄し、かつ世界の人々から敬愛されるような魅力ある地域となるためには、文化立都を目指さなければなりません。本日は文化の持つ力と役割を再認識すると共に、いろいろな課題や具体的な取り組みを推進するための方策などについてご議論いただき、私共が目指す文化立都への新しいマイルストーンとなることを願っています。

関西・大阪文化力会議リポート
2012 年 4 月 25 日／大阪国際会議場

紀の太平洋と西

羅 鍾一
元駐日大韓民国大使

谷内正太郎
元外務事務次官

株式会社大阪国際会議場会長　秋山喜久（主催者挨拶）

近年著しい発展を遂げるアジア太平洋地域において、その繁栄を将来にわたって持続するには、地域の平和と安定が不可欠です。その際、鍵となるのは文化を軸に交流を広げ、お互いの理解を深めることです。この会議を通じて、文化交流や相互理解のあり方、さらにはその中で関西が果たすべき役割について議論することは大変意義深いことだと思います。

関西は歴史遺産や伝統文化の面において日本の中核的な地位にあります。これらの資産を最大限活用して文化力を一層高めていき、アジアさらには世界へと発信し、地域の発展に大きく貢献することを期待しています。

主　催：公益財団法人　関西・大阪 21 世紀協会／株式会社大阪国際会議場／大阪国際フォーラム
後　援：公益社団法人関西経済連合会／大阪商工会議所／一般社団法人関西経済同友会／経済産業省近畿経済産業局／国土交通省近畿地方整備局
特別協賛：凸版印刷株式会社

今こそ求められる日本の文化発信力

「日本人は規律正しく勤勉な国民性で成功してきました。もし他の国々が日本の文化的価値観を取り入れるならば、日本人と同じような仕事ができるようになるでしょう。」

マハティール・ビン・モハマド氏
元マレーシア首相

流動する世界

世界は絶え間なく変化し、今の時代はすべてのものが流動的です。すべての動きがさまざまな方向に向かっているので、われわれはどこへ導かれているのか予測しがたいですが、そんな時代だからこそ、私たちにできる最善の方法は、冷静に考えることなのです。

第2次世界大戦では、アメリカ、イギリス、そしてその他のヨーロッパ諸国の連合国に、ドイツ・イタリア・日本は敗北しました。その時、誰もが今後は戦勝国が繁栄し、未来の世界を支配するだろうと考えました。しかし現在、ヨーロッパでは敗戦国ドイツが経済大国となり、他のヨーロッパの国々は金融危機に瀕し、その克服もドイツに頼っている状況です。アジアにおいても敗戦国だった日本が復興し、世界第２位の経済大国へと成長しました。戦争で大きな被害を受けた韓国も、強い工業国として頭角を現しています。また、中国は社会主義を放棄し、部分的に市場経済を取り入れることで経済強国になりました。

中国の脅威はあるのか

第2次世界大戦直後の中国は戦勝国側だったにも関わらず、いつしかその立場を変え、今ではかつての同盟国から非友好的だとみなされています。そして今や、経済力や軍事力で台頭する中国は、アメリカやヨーロッパ、日本の心配事にもなっています。つまり、中国がアメリカやヨーロッパよりも優位な立場に立つのではないかという懸念であり、中国が世界を経済的にも軍事的にも支配するのではないかという恐怖を感じているのです。

では、いったい中国は世界に対し、どのような脅威を与えるというのでしょうか。私は、中国は軍事的な冒険をしないだろうと見ています。なぜなら、中国は他の核兵器保有国と同様に、核戦争が起きれば敵国だけでなく

自国さえも破壊されることを理解しているからです。また、世界で力を有するには戦争で勝って敵国を占領するよりも、経済的に優位に立つ方がはるかに効果的だし、国も豊かになると悟っているとも思えます。

中国が望んでいるのは、世界が繁栄し、中国製品をたくさん買ってくれることです。中国は過去にいくつかの隣国を併合してきましたが、ヨーロッパのように征服したり植民地化した歴史はありません。東南アジア諸国は2000年近く中国と交流してきましたが、中国に征服されたことはないのです。一方、ヨーロッパ諸国は東南アジアの国々と出合うや否や征服し、植民地化しました。率直にいえば、中国は軍事的脅威ではありませんが、経済的には多くの国々を脅かしているといえるでしょう。

国の繁栄に繋がる日本の価値体系

私たちが民族や国家の違いを感じるのは、地理的な違いや身体的特徴によってではなく、文化や価値体系が異なるからです。つまり、民族や国家が発展するかどうかは、文化や価値体系にあるといえます。例えば、勤勉・努力・規律を尊重することに価値をおく国であれば、その国の人々は日々の生活を円滑にし、経済的に成功するためにできるだけ勤勉であろうとし、規律を守るよう努めるでしょう。それに反し、怠惰で規律正しくないことに価値をおくとすれば、民族や国家としての発展や成功は期待できそうにありません。

日本人は規律正しく勤勉で、失敗を恥だと考える国民性によって、これまで成功を得てきました。なぜなら、結果が出せないことは面目が立たず恥ずかしいと考えるからです。このような気質から、日本人は目標を達成するために懸命に取り組むという、労働倫理が形成されてきたといえます。そして、まじめに働き、成功したいという熱意によって、良品を納期通りに納めるという結果に繋がってきたわけです。

私は1961年に初めて日本を訪れた時、敗戦から見事に再建を遂げた日本をこの目で見ました。そこには賃金アップを求めてストライキを起こすことなどせず、一生懸命働く人々の姿がありました。それはある意味、自己犠牲の精神さえも感じさせる懸命な姿でした。これを見て私は、日本という国から学ぶことはたくさんあると実感し、実際、1981年に首相に就任したとき、日本人の集団主義と勤労精神に学べという“ルックイーストポリシー”を提唱したのです。日本人に学ぶべき点とはすなわち、「一生懸命仕事をする」「細かいことにも手を抜かない」「高い技術を提供する」といったこと。これが、日本が他の国に提供できる尊い価値なのです。

もし他の国々が日本の文化的価値観を取り入れたならば、日本人と同じような仕事が必ずできるようになるでしょう。とはいえ他国には他国の価値体系があるため、その価値体系を捨てて、日本文化をそのまま取り入れることは容易ではありません。しかし、日本人と東南アジアの人々、あるいはその他の国民との間の交流をもっと活発にしていくことでお互いを理解し、両者の素晴らしい価値観を学ぶことができると思います。

日本の文化や価値観を広める

日本の文化を広める最良の方法の一つが、アジアからの留学生を受け入れることです。しかし、日本は生活費が高いため、アジアの学生が日本で生活することは容易ではありません。そこで私たちは、日本の大学や研究機関にマレーシア分校を設置するよう提案してきました。マレーシアにいながら日本の労働倫理やシステムを学ぶことができれば留学費用は大幅に削減できるし、経済的に恵まれない学生も助かるでしょう。彼らが日本人の労働倫理と文化を身に付けられれば、生産性は多いに改善

されます。また、日本の教育者もそこで外国の文化を理解し、彼らとよりうまく付き合えるようになることで、日本人と他国の人々との友好関係を築く助けとなり、国際交流の改善に貢献できると思います。

隣国の繁栄を自国の成長に

冒頭で述べたように、世界は流動的な状態にあり、この状態を作ってしまったのは飽くなき物質主義が原因です。富を追求するあまり貪欲さが美化されてしまったのです。

かつてアジアで金融危機が起こった時、ヨーロッパ諸国の政府は倒産の危機に直面した企業を救済すべきではないと言い放ちました。しかし、サブプライムローン問題で同じようなことが自国で起こった時、ヨーロッパ諸国の政府は企業を救済しただけでなく、まったく後ろ盾のない紙幣を発行しました。この紙幣は実際には何の価値もなかったため、他の通貨に対する価値を下げる結果となり、ヨーロッパやアメリカの経済状況の悪化を助長しました。これによって東南アジアの製品はヨーロッパやアメリカで売れなくなり、東南アジア諸国も多大な影響を受けました。

マレーシアでは、「隣国の繁栄を助ければ、それに伴って自国も繁栄する」という共同繁栄政策を推進してきました。隣国が繁栄すれば、マレーシアに対して問題を起こすことが少なくなり、さらにはマレーシア製品を売る市場も育つという考えです。隣国を貧しくさせることによって自分たちが富もうという“ゼロ・サムゲーム”は、反生産的だと考えています。アメリカやヨーロッパといった高コスト国がアジアの途上国に投資をすることで隣国が繁栄し、欧米にとっても新たな市場開拓ができるのです。

日本はかつて東アジアをリードする立場にありました。しかし、韓国と中国が台頭して以来、日本は自国でできるニッチ産業を探そうとしてきませんでした。日本の技術力は非常に高度なので、韓国や中国と競争するのではなく、今現在、彼らがやっていないこと、できないことを日本はやるべきだと思います。また、日本はアメリカという国の存在やアメリカの意見を気にしすぎているように見えるので、世界の他の国々からリーダーとして認められないのだと思います。日本はもっと積極的に意見を主張すれば、リーダーになることができると私は確信しています。

（文責：関西・大阪21世紀協会）

マハティール・ビン・モハマド
1925 年生まれ。医学博士。開業医から政治家に転じ、1981 年にマレーシア第 4 代首相に就任。以来 22 年間、首相の地位にあり続け、卓越した指導力によりマレーシアの高度経済成長を実現させた。1990 年には EAEG（東アジア経済圏構想）、後の EAEC（東アジア経済協議体）のビジョンを提示し、地域経済協力の枠組みの必要性を述べるなど、独自のアジア的価値観を持つ。

アジア太平洋の安定と発展のために選択すべき文化戦略

「安全保障は、一人ひとりの幸福や利益にかかわる文化の問題として捉えてほしいと思います」

羅鍾一氏
元駐日大韓民国大使

安全保障としての文化政策

私が皆さんにお伝えしたいことは、次の二つのメッセージに集約されます。一つめは欧州統一の父といわれるフランスの実業家・政治家ジャン・モネ（1888～1979年）の言葉、「われわれは国々を同盟させるのではなく、人々を結びつけるのだ」。二つめはロシアの小説家イワン・ツルゲーネフの小説『処女地』の一節にある「新しい土地を開拓するには、深く耕さねばならない」です。本日申し上げることは、この二つの言葉が根底にあります。

さて、中国の革命家・孫文は、1924年に神戸で講演をした際に「日本は西洋の後を追って覇道を追求するか、アジアにおける王道の最後の砦となるのか」と問いかけました。この言葉は、今なお北東アジアの安全保障において深い意味を持ち続けています。

覇権あるいは王道に基づいた国際関係とはどういうものでしょうか。ある学者は、「覇道によるリーダーシップの発揮は、国際関係の安定を保障するが、王道は曖昧で定義が難しい」と言っています。孫文は日本が覇権を握ることを恐れましたが、20世紀初頭、近代化の幕開けの時代に、日本であれ、その他の国であれ、覇権や覇道の追求を諦めて、王道の実現にかけることができたかは疑問です。現在、国際関係は、権力者による覇権の追求とそれに対する抵抗勢力、もしくは均衡化への努力によって特徴づけられます。すなわち、安全保障なくして地域の発展や開発はないということですが、私は、軍事や外交といったハード面もさることながら、文化政策などのソフト面からの安全保障も大事だと思います。皆さんに選んでいただきたいのは、後者の道です。安全保障は専門家だけに任せる問題ではなく、一人ひとりの幸福や利益にかかわる文化の問題として捉えてほしいと思います。

新時代の国際関係には新しい概念を

国家や民族間の関係は、「同盟」「対立」「力の均衡」「覇権」など、19世紀から使われている言葉で語られているわけですが、直近の歴史に対する認識も一致し

ておらず、いまだに軋轢を残している部分もあります。

また、日本や中国、韓国、ロシアなど現在も領土問題を抱える国があり、それぞれが相手の国情や兵力に関心を向けています。例えば北朝鮮の核武装については、アジア地域のみならず、世界中の関心事です。今年4月に北朝鮮が人工衛星を打ち上げた時、国際社会は一斉に軍事目的だと非難し、北朝鮮の友好国である中国とロシアでさえ「国民の福祉を考えなければ、多くの民衆が食糧難で亡命するだろう」と警告しました。政府が定義する国益が民衆の利益と一致するかどうかは意見の分かれるところですが、米国のある政治学者は「権力者の国益に対する考え方と民衆の要求は食い違う。民衆の希望は具体的かつ切実で、控えめなものである」と指摘しています。しかし、どんな社会においても、支配者階層は自分たちが求める国益は一般市民の利益と一致すると主張します。英国の外交官オリバー・フランクス男爵は、1950年代半ばに「英国人にとって英国が大国ではないと考えることは不可能である」と言いました。当時の英国は深刻な食糧難にあり、配給制が敷かれていたにもかかわらず、支配者層は大国として君臨し続けることを優先していたのです。

このように、既成概念は人々をミスリードする危険性をはらんでいます。ですから安全保障を語るには、新しい概念を持つ言葉を蓄積していかなければなりません。ジャン・モネは「単一の目的を追求していると人間の心はかたくなになる」と主張しました。私はこれに共感し、「共同体を構築するには、人々の心を構築せねばならない」と論文に書いたことがあります。

私たちは影響しあって存在している

昨年、北東アジアでは、非常にささやかですが、国際関係に進展がみられました。まずは日中韓三者間協力事務局が設立されたこと。次に中国が文化重視の指針を示したことです。胡錦濤国家主席は、「文化は国民を結び付け、創造力を高め、ますます重要な要素になる」と発言しています。

しかし、文化をナショナリズムという偏狭な枠にはめてしまうのであれば、少しも前向きな要素にはなりません。フランスの哲学者ジャック・デリダ（1930～2004年）は「すべての文化は本来植民地的である」と言いました。諸民族間の影響が混じりあって文化が生まれるのであって、いわゆるナショナルカルチャーは存在しないという意味です。

どの国においても、自国の文化遺産には他国との交流の影響が見られるということを忘れられがちです。例えば、歌い手と太鼓奏者によって奏でられる「パンソリ」を私は韓国独自の民俗芸能だと思っていましたが、中国や日本にも同じような、太鼓を叩いて物語性のある歌を歌う芸能があることを知りました。私たちは影響し合って存在しているのです。だからお互いの文化について言い争うことは賢明ではありません。

価値観についても、私たちは共通点を見出すことができるはずです。イデオロギーがどうであれ、基本的に誰もが求めるのは自分と家族の安全でしょう。私は、こうした共通点を見出すことで、複数の市民団体が国境を越えて協働する、国際的な市民社会が実現する日を心待ちにしています。SNS（ソーシャルネットワークサービス）は、その可能性の一端を見せています。トップダウンで民主化を押し付けるのではなく、草の根レベルで始まり、国籍や文化の違いを乗り越えて、共感の輪を広げることが大切だと思います。

文化や価値観で結ばれた共同体の実現は、新しい思考と言葉を獲得できるか否かにかかっています。SNSには負の側面もありますが、この新技術をいかに有効活用するかは、自分たちで学びとっていかなければなりません。東日本大震災発生直後、ある一人の韓国人の思慮のないツイッター発言に対し瞬く間に大勢の韓国人が批判の声を寄せたことでも、そのように感じました。

歴史の共通理解に取り組む

近代以前は日本から朝鮮半島を経て中国へ、近代以降は中国・韓国から日本へ留学生を送ってきました。しかし近年は、学生が３か国間を自由闊達に行き来し、学びを深めています。日本文学、韓国ドラマ、中国映画などは、商業的市場を広げているだけでなく、お互いの文化

に興味を持つ人の輪を広げることにも役立っています。私は歴史的な紛争についても、共同体をつくって研究するのが望ましいと思います。すでに日中、日韓の二国間協定がありますが、双方が妥協し、同意をみるのは非常に困難です。ですから第三国の人たちも参加して、歴史の共通理解に取り組むようにしてはどうかと思います。

人権は人類普遍の価値

共通の価値観を追求することは、北東アジアに限ったことではなく、国籍やイデオロギーの異なるすべての人々をつなぐ手段だと私は信じています。1980年代初頭、ユネスコのアジア支部が開催した平和と人権に関する会議に出席した私は、アジアの人権宣言の起草を任されました。当時は冷戦下でしたので、どうすれば皆の同意を得られるかと悩みましたが、結局、すんなり全員一致で承認を得ることができました。この経験を通じて、思想信条を越えて人々は分かりあえると確信したのです。

「人権」という言葉に政治的な意図を感じて嫌う人もいますが、人権は人間共通の価値であり、国家の発展を追求する上でも、人権には共通の原則を見出すことができます。以下は私が考えた「人権」の共通原則です。

（1）本質の原則。軍事・外交上だけでなく、雇用や環境、精神面の安全も満たされなければならない。

（2）参加の原則。自分たちにかかわる重要な決定に参加できる社会であること。

（3）判断の原則。自分たちの社会の政治システムを自分たちで判断する権利を持つ。

（4）選択の原則。現存の価値観やシステム以外に、選択肢が提供されなければならない。

（5）普遍性の原則。国境を越えて同じ市民倫理を適用すること。

（6）倫理統一の原則。倫理に公私の別があってはならない。政治家の犯罪に政治的大義名分があったとしても、一般人と同じ基準で裁かねばならない。

われわれはどうあるべきか

最後に、中国のあるブロガーの言葉を紹介します。それは、「われわれが誰であるのかがこの地域を決める。われわれがどうあるかが、われわれの安全保障を左右する。われわれが賢明であれば、地域全体は暗闇にはならない。無関心であれば、地域はそれなりのものにしかなりえない」というものです。私は、これは非常に的を得た見解だと思います。

結局、われわれ一人ひとりに安全保障の将来が託されているのです。冒頭で述べたツルゲーネフの言葉通り、やはり北東アジアの安全保障は「深く耕すことが必要」なのです。

（文責：関西・大阪21世紀協会）

羅　鍾一（ラ　ジョンイル）
元駐日大韓民国大使、漢陽大学校国際学部碩座教授
1940 年ソウル生まれ。ソウル大学校政治学科卒業、同大学院修了。1972 年ケンブリッジ大学政治学博士号取得。1972 年慶熙大学政治外交学科教授、1988 年～93 年同大学大学院長。2001 年～03 年駐英大使、大統領国家安保補佐官等を経て、2004 年～07 年駐日大使。2007 年～11 年又石大学校総長（第 10 代）等を歴任。2011 年 9 月より現職。

歴史に学ぶ文化力

「細川家が戦国乱世を生き抜くことができたのは、徹底した情報作戦を行っていたからなんです」

細川
元内閣総理大臣
護熙氏

細川家の歴史から文化力を考察

細川家は南北朝時代から700年近く続く家系で、もともとは源氏の流れを汲み、遡れば源義家や新田義貞といった名前が挙がってきます。守護を務めていた室町時代から数えれば私で26代目。近世以降、中興の祖・細川幽斎から数えますと18代目になります。本日は、こうした細川家がどのようにして戦国乱世を乗り越え、長く歴史に名を残してきたのかについて、ファミリーの歴史を振り返りつつお話しいたします。

そもそも細川家は足利尊氏の下で武勲をたて、守護になったのが始まりです。当時、管領として活躍したのが細川頼之でした。頼之は、すぐ下の弟・細川頼有と共に、近畿や中国の一部、さらには四国地方にもおよぶ広大な範囲を管轄する非常に優れた政治家であり、また武人でした。しかも、ともに文人としての才能にも長け、千載和歌集には二人の歌が紹介されているほどです。

また、当時は下克上時代で、世の中全体に緊張した空気が張りつめ、政治や世相も乱れ、なかなか一つにまとまらなかった時代でした。そうしたなか頼之・頼有の兄弟は、当時の武人としては珍しく穏やかで温和な性格だったことから、人々の心を見事に掌握して政治をまとめ、室町幕府の確立に貢献しました。後年、勝海舟は、彼らの人柄があってこそ成し遂げられたものだと評しています。

忠義を重んじた細川幽斎

その後、中興の祖である細川幽斎は、足利義晴、足利義輝、足利義昭、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と、まったく異質な六つの政権の中で長年重要な役割を果たし、常に相談役的存在として重んじられました。源氏物語や伊勢物語を写本するなど勉学に勤しむ文人でもあり、武人としての腕も相当なものでした。ある時、京都の市中で暴れ牛を見た幽斎は、その前に立ちはだかり、牛の角を持って押し返したといいます。この他にも幽斎はエピソードに事欠かない人物で、何度も生きるか死ぬかの危機に直面しては、胆力

田辺城（京都府舞鶴市）

と知略でピンチを回避しています。生涯で60数回もの戦に出ましたが、一度も負けたことがなかったといいます。それほど勝負強かったといわれています。

なかでも明智光秀との逸話は印象的です。幽斎の長男・忠興が光秀の娘・玉（細川ガラシャ）を娶っていたため、光秀から共に豊臣秀吉を討とうという要請が再三ありました。しかし、幽斎は光秀と親しい関係ではあったものの、織田信長に対する恩顧もあり、悩んだ末に光秀と対決する道を選びました。じつはこの時、近畿地方は完全に光秀の支配下にあり、秀吉側に付くのはかなり厳しい状況でした。そう考えると、いくら信長への忠義を全うするためとはいえ、この決断にはかなりの勇気がいったことでしょう。しかし、幽斎の決断によって戦の形勢は逆転し、明智光秀は山崎の戦いで敗死。その後、幽斎は光秀を討った秀吉に重用され、山城西ヶ岡に3000石を与えられ、紀州征伐、九州征伐にも加わり着々と武勲を上げていったのです。

徹底した情報作戦で乱世を生き抜く

このように細川家が乱世を生き抜いてこられたのは、当時から徹底した情報作戦を行っていたことが理由の一つとしてあります。

現代は情報化社会といわれますが、戦国時代の細川家もさまざまな情報作戦を展開しており、その方法もじつにユニークなものでした。例えば、織田信長が討たれた本能寺の変の時、主君である信長の周辺にさえもスパイ（忍者）を送りこんでいたのです。その忍者というのが、細川家では修験者（山伏）でした。ではなぜ修験者だったのか。当時、修験者は、日頃からあちらこちらの城下町を歩くのが常でした。さまざまな場所を歩くことによって、“ここは3か月前よりも景気が悪くなっている”とか、“どうやらここではお家騒動が起こっているようだ”などと、幅広く情報を得ることができたわけです。他の大名は誰も修験者には目を付けていなかったようですが、細川家は早々とその点に着目して修験者と手を結んでいたのです。数多くの情報を持っている修験者を活用することで、細川家は常に情報を蓄積でき、非常時にもすかさず対応できたといわれています。その一例が、先ほど述べた本能寺の変の逸話です。

6月2日未明に本能寺の変が起こった時、幽斎は丹後の田辺城にいました。本能寺がある京都と丹後は、その間16里（約64km）もあり、加えて明智軍が完全に道路を封鎖していました。しかし修験者によって、勃発からわずか3時間半で田辺城に第一報がもたらされたのです。もちろん、その時点で他の大名にはまったく情報は伝わっていません。一方、誰よりも早く情報をつかんだ幽斎は、すぐさま秀吉側につくことを決断して事なきを得ました。情報を活用するということは、昔も今と変わらず非常に重要なことだったのです。

我欲を捨てることが身を助ける

幽斎の逸話はまだまだあります。関ヶ原の戦いで石田三成が率いる軍勢に田辺城が襲撃されたときのこと。1万5000人もの大軍に包囲された時、田辺城にいたのは幽斎を筆頭に老人や子供のわずか500人ほどでした。1万5000人対500人という圧倒的な数の違いに、誰もがすぐに勝負がついてしまうだろうと思っていました。しかし幽斎は戦上手だったこともあって、守備軍の抵抗は激しく、なんと3か月もの長期戦へと突入。もはやこれまでと幽斎が討死を覚悟した時、後陽成天皇の勅使によって和議がなされ、危うく難を逃れました。こうした逸話のように、幽斎は時代にどっぷりと浸りながらもピンチをするりとかわし、世情を見極めながら、どの時代でも重要な役割を果たしていきます。

なぜ彼はそうありえたのでしょうか。それは幽斎自身、欲のない人だったからだと私は思うのです。「もっと領地をよこせ」とか「位を上げろ」といった欲を出していたら、たちまち周囲にやっかまれ、上の者に疎まれ、細川家は早々と滅んでいたのではないかと思います。幽斎を筆頭に細川家の人々は常に中庸な道を選び、その姿勢を崩さなかった。例えば、加賀にある前田百万石に行ってくれないか、あるいは蒲生氏郷の百万石はどうかなどと誘われたこともあったようですが、そのつど幽斎も忠興も「そんな大きなところは身に余る」ときっぱり断っています。このように欲を抑え、堅実な道を選んで生きていったことで、細川家が長く続いてきたのだと思います。

時代の記録を礎にして文化力を磨く

細川家は代々記録を大事にしてきた家系です。江戸時代は265年間ありましたが、当時の担当者は毎日一日も欠かさず日誌を付けておりました。それを見ると、例えば赤穂浪士の討ち入りがあった元禄15年12月14日の天候は、歌舞伎やお芝居では必ず雪として描かれていますが、じつは曇りだったことが分かります。また、こうした記録を読み返すと、新たな歴史の事実を数多く発見することができます。その一つが、赤穂浪士討ち入りの新事実です。芝居では吉良上野介は炭焼き小屋に隠れていたのを引きずり出され、眉間の傷から上野介と判明し斬首されたと描かれています。が、実際は吉良邸に討ち入った浪士たちが邸内にいた者の首を全て刎ねてしまい、誰が誰だか分からなくなっていたようです。そこで上野介と判明する決め手となったのが、特別な身分の者しか使わないお香の香りの漂う着物を着ていることだったと、後に大石内蔵助が語っているという記録が残されています。また、巌流島の決闘も、じつは佐々木小次郎は宮本武蔵との決闘の際に死んでおらず、脳しんとうを起こして倒れていたところを、決闘後に島に上陸した武蔵の弟子たちがそれに気付き、とどめを刺したという驚きの新事実が細川家に残っている資料から新たに分かりました。

現在、細川家が所蔵する古文書は5万点もあり、数が膨大であるため、まだその一割も解読されていません。ですから今後も歴史の中で語られていなかった貴重な話が、この資料の中から続々と出てくることでしょう。

細川家はこうした記録や手紙を通じて、各時代の文化を今に伝えており、それが700年の礎になっていると思います。そう考えると、細川家はさまざまな文化力によって続いてきたといえるのではないでしょうか。『歴史に学ぶ文化力』として、少しでもご参考になればと思います。ありがとうございました。

細川護熙（ほそかわ もりひろ）
1938年東京生まれ。祖父は総理経験者の近衛文麿。上智大学卒業後、朝日新聞記者を経て、衆参議員、熊本県知事を務める。1992年日本新党を旗揚げし代表に就任。1993年第79代内閣総理大臣就任。1998年に政界を引退。その後、講演活動などで全国を飛び回る傍ら、作陶や書、水墨、油絵なども手掛ける。

アジア太平洋時代の日本外交

「オバマ大統領は、就任後初の外国賓客として麻生首相をホワイトハウスに招き入れた。それはブッシュ政権時代とは異なり、アジアを重視するんだという明らかなメッセージだった」

谷内
元外務事務次官
正太郎氏

今世紀最大の外交課題

2011年にIMF（国際通貨基金）が発表した東アジアの貿易総額は、ASEANに日本と中国、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、インドを加えた16か国で9.3兆ドルとなっており、近いうちにEUの10兆ドルを抜くであろうといわれています。また、ASEANに中国とインドを加えた過去10年間の経済成長率は4.2%で、世界平均の約2倍となっています。こうしたアジアの勢いに加え、オバマ政権がアジアへの関与を深めてきたことで、今や『アジア太平洋時代』といわれています。そして、その中核にあるのが中国です。

中国は毎年平均9.4%という経済成長を続けており、2010年にはGDPで日本を抜いて世界第2位の経済力と軍事力を持つに至りました。日本やアメリカにとって、こうした中国とどのように付き合っていくかは、今世紀最大の外交課題となっています。もとより日本は今後もアメリカと手を結んでいくことが賢明だと思いますが、同じように中国とも仲良くできるのかといえば、それは難しいでしょう。

中国を国際秩序に関与させる

中国が経済発展を持続させるためには食糧や資源、エネルギーなどを輸入しなくてはならず、そのためにシーレーンを確保しなくてはなりません。日本やアメリカのような海洋国家は、“海はグローバル・コモン（公共の財産）であり、自由で開かれた秩序のもとで利用する”という考えを持っています。しかし、中国は自分たちのものは自分たちで確保するという考えですから、例えば、南シナ海や東シナ海は日本の瀬戸内海のように内海化したい、いずれは第一列島線や第二列島線（中国の戦力展開の目標ライン）からアメリカの軍事的影響力を排除したいという考えを持っています。

こうした中国に対して、日本は三つの手だてを講じておく必要があります。一つめはアメリカとの同盟関係を堅固なものにしておくこと。二つめは、海洋はグローバル・コモンだと考える国々と協力し、中国に対して自由で開かれた海洋秩序を守るよう働きかけること。三つめは、それを世界中の国々に理解してもらうことです。大

事なことは、中国を排除するのではなく、国際秩序に積極的にエンゲージ（関与）させていくことなのです。

スマートパワーを外交戦略に

ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授は、軍事力や経済力などのハードパワーと、説得と魅力などのソフトパワーを賢く組み合わせる能力、すなわち“スマートパワー”を外交戦略に活用すべきだと提唱しています。

日本人は東日本大震災で示されたような、他者への思いやりや冷静な行動といった素晴らしいソフトパワーを持っていますが、国際社会においては、ソフトパワーだけで相手を説き伏せることは難しいでしょう。2010年、尖閣諸島沖で中国漁船が日本の巡視船に故意に衝突する事件が起きた直後、ヒラリー・クリントン国務長官は、「尖閣諸島問題に日米安保条約の適用あり」と明言しました。いざとなればハードパワーを使って中国を説得するというのですが、日本もそのような体制を備えておかなければ国民を不安にしてしまいます。これは北方領土問題についてもいえます。

文化力は外交戦略上非常に大事なことですが、スマートパワーのなかにはハードパワーも含まれています。日本は今後、スマートパワーをいかに発揮するかということに智恵を振り絞っていくべきだと思います。

日本がイニシアティブをとる

明治以降、日本は国際法のなかでは優等生として振る舞い、第２次世界大戦の敗戦から立ち直って世界大国の一つになりました。そうしたなか、外交や今後の方針を立てる際には、つねに国際情勢に合わせた考え方をしてきました。だから日本の国益をきちんと定義し、その上でどうするかという発想をあまりしてこなかったのです。私は、日本の国益を明確に定義すると同時に、国際社会のルールづくりにイニシアティブをとって関わっていくべきだと思っています。日本のような経済大国がリーダーシップをとれないはずはありません。

とはいえ日本の国益を考えるとき、儲かるからこれをやろうというような近視眼的な発想であっては、国としての将来は立ち行きません。世界の平和や自由、人権といった普遍的な価値こそが、国際社会全体の公益になります。それを日本の国益とできるだけ合致するよう、人や金を投じて努力することが、これからの外交には一層必要になってくるでしょう。

TPPを推進し国内改革に活用

戦後、日本が国際経済面で積極的なイニシアティブをとってこなかったのは、国内に守るべきものがあったからです。私の外交官経験からいえば、それは例えば農業であり、米でありました。ウルグアイラウンドで私は、政府の命によって「米は一粒たりとも輸入させない」「米作りは日本の文化であり宗教である」と主張し、その言葉がニューヨークタイムスに掲載されました。しかし、これが説得力を持っていたかというと、疑問に思うこともありました。

現在、いろいろご意見はあると思いますが、私はTPP（環太平洋経済連携協定）を推進すべきだと思っています。その理由は、アジア太平洋地域の成長プロセスを日本の活力として取り込んでいくためです。また、この地域のなかで、アメリカに建設的な役割を果たしてもらうよう巻き込んでいくことも必要だからです。

農業がつぶれてもいいなんて思う人は世界中、日本中誰もいません。だからこそ日本の農業を強い農業、輸出志向の攻めの農業にする。日本人はそれができる力を持っているし、やるべきだと思います。そのためにTPPを活用するんだというぐらいの積極的な姿勢が必要だし、同時に国際社会のルールメーカーとしての役割も果たしていくべきだと思っています。

谷内正太郎（やち しょうたろう）
1944 年金沢市生まれ。69 年東京大学大学院法学政治学研究科博士過程修了。同年外務省入省。在ロスアンジェルス総領事、総合外交政策局長等を経て外務事務次官（2005 年～08 年）。ハーバード大学国際問題研究所フェローとしての研究経験などもあり。現在、早稲田大学日米研究機構日米研究所教授、慶應義塾大学大学院 SDM 研究科客員教授、東京大学教養学部非常勤講師。編著書『外交の戦略と志』（産経新聞出版）、『論集・日本の外交と総合的安全保障』（ウェッジ社）等。

急成長する東アジアの光と影
安定と発展のための日本の文化戦略

国分良成氏
防衛大学校長

佐藤茂雄氏
京阪電気鉄道
取締役相談役　取締役会議長

萩尾千里氏
大阪国際会議場
代表取締役社長

谷内正太郎氏
元外務事務次官

（50音順）

コーディネーター
大林剛郎氏
大林組 代表取締役会長

Session 1

中国をはじめ、台頭する東アジア諸国。
日本は今、そうした国々とどのように付き合い、
アジアの先進国として、
いかなるリーダーシップを発揮していくべきか。
また、日本の魅力と新しい価値を創造するために、
文化戦略はどうあるべきなのか、議論を交わした。

中国の政治・文化情勢

大林　このセッションでは、第1部で成長を続ける中国および東アジアのダイナミズムについて、第2部ではそれをふまえて日本はどのような文化戦略をとっていくべきかの2部構成で議論を進めてまいります。最初に、東アジアのダイナミズムを牽引し、GNP世界第2位の国、その成長パワーに世界が注目する中国の現状について、中国の専門家でもある防衛大学校長の国分さんにお話しいただきたいと思います。

国分　最近、中国政府は「核心的利益」という言葉をよく使います。これは台湾やチベット、南シナ海などに対する言葉として解釈されがちですが、中国にとっての核心的利益とは政治権力、つまり中国共産党体制の維持だと思います。

そのために何が必要か。経済成長です。中国は今から20年前に社会主義市場経済を導入し、外貨を大量に獲得し、飛躍的な成長を遂げました。その体制を維持するためにも政治権力の維持が国内での最大のテーマとなっています。常にトップがすべてを決定する体制であるため、権力を握らないと新しい大胆な政策は展開できません。その結果として重慶事件などの権力闘争が繰り広げられているわけです。その根幹には、中国が普遍的な価値を共有する国家を目指すのか、従来の中国モデルや中国標準のままでいくのかという論争があります。普遍的価値、グローバル化の重要性はわかりつつあるのですが、反対勢力も相当います。しかし中国は今や、上層部でそんな論争をしている余裕はないほど、経済や社会問題が深刻化しています。課題は山ほどありますが、最も重要なことは中国が低成長の時代に入りつつあるということです。

今後、中国が成長の原動力を見出すためには、やはり外貨に頼らざるを得ないでしょう。しかしそれを推進するためには、中国の国家体制そのものが変わらなければならないと思います。政治体制の透明性、公平性、開放性がない現状では、いくら中国の魅力を声高に説明されても説得力がないというのが、多くの外国人が抱いている感情でしょう。

国分良成氏

文化政策としては2004年から海外の大学などと連携し、中国語や中国文化を普及・教育する孔子学院を展開しています。日本でも十数校開設されていますが、効果は出ているのかと中国内部でも論争になっています。この孔子学院にしても、真の魅力を発揮するためには、政治体制に関わってくると思います。ただし、中国の大きな強みは人材の豊富さです。これは仮定の話ですが、政治体制が変われば人材はものすごい勢いで出てくると思います。

萩尾　私が30年来、中国とおつきあいをしてきた経験から感じることは、未だに中国の良い面と分からない面が背中合わせにあるということです。それゆえに、安全保障も含めた問題をアジア諸国とどう共有していくか。私は、経済だけの短絡的な視点で見るのは危ないと思っています。

中国は文明の成熟においても途上国です。成長すればするほど国内の貧富の格差が広がり、インターネットの普及で共産党の権力そのものが不安定です。そういう国が日本や世界に大きな影響を及ぼす国になっている。しかし、このあたりでもう一度、日本は中国とのつきあい方を見直してみるべきだと思います。企業もかなり投資して収益を上げています。しかし中国がつまずくとどうなるかということをきちんと認識し、日本だけでなくアジアの平和勢力を結束していく。その舵取りに早く切り替えていくべきだというのが私の実感です。

谷内　先程、国分さんのご発言にあったように、中国にとっては共産党権力をいかに維持していくかが最大のテーマであり、世界で覇権を確立するとか、国際国家として世界に新しいモデルを示そうとか、そんな余裕はないと思います。

もう一つは、中国は世界のリーダーになり得るのかという点です。確かに世界第2位の経済・軍事大国ですから、リーダーになり得る力はあるわけですが、中国は普遍性を持った求心力のある価値観を世界に発信していません。ですからよほど特殊な事情がない限り、中国に頼りたいという国はないだろうと思います。中国はまず国内問題を解決し、その後、国際社会でのリーダーの道を進むのか進まないのかと議論をする状況にあると思います。

佐藤　ビジネスや友人関係を通じて中国の方に接する機会が多いのですが、そうした人たちのなかにはアメリカ帰りのエリート層が多く、上層階級に入り込んでいます。私たちと価値観を共有できる人が増えていると捉えていいと思います。ただし大変な格差社会ですから、それをどう解釈するかは難しい問題です。

日本は新しいモデルを示せるか

大林　佐藤さんは大阪商工会議所会頭として中国をはじめアジア各国と交流されています。他の国の状況はいかがでしょうか。

佐藤　今年の2月に大阪商工会議所の視察でベトナムやミャンマーを訪れました。ベトナムでは国家主席が国のビジョンを熱く語られたのが印象的でした。「これまでベトナムは組み立て産業を担ってきたが、これからはモノづくりを始める。ベトナムブランドを創りたいのだ」と。トップが語るビジョン、そ

れに取り組む姿勢が官僚から一事業家に至るまでベクトルがきちんと合っているのです。国を挙げての取り組み、まさにダイナミズムが感じられる。そこのところが今の日本と違う。外国から見ると、日本の勢いのなさを情けなく感じます。経済のグローバル化が進んでいるなかで、政治がついていけていない。経済と政治との乖離を何とかしないといけません。

日本には、モノづくりの先進国として協力できることがたくさんあります。また、中国やベトナムなどの勃興国、東アジアのダイナミズムをいかに取り入れていくかが日本経済を左右するでしょう。さらに、先進国として少子高齢化問題、社会安全保障などの問題を解決して新しいモデルを作り出し、アジア諸国に示す。それこそ日本が取り組むべき大きな課題ではないでしょうか。

国分　日本が戦後60年をかけて体験してきた経済成長やエネルギー危機、通貨問題、公害問題などが、中国では最近20年で一挙に押し寄せています。先が見えないのは当然で、しかも一部に富が集中している。中国政府は、この状況を打開するには政治改革しかないと分かっているのです。分かっているけれどもできない。簡単に言えば既得権益を手放せないということです。

そこで日本の役割ですが、先ほど佐藤さんがおっしゃったように、日本はもう20年間も足踏みをしている。余裕も全くない状態です。やはり自由主義経済、民主主義体制を前提としながら、社会保障、安全保障をどのように確立できるかを目指すべきです。それができた国はまだアジアには存在しないのです。そのモデルを日本がきちんとつくる以外にないと私は思います。

日本の国民性は誇るべき文化

大林　ここからは第2部として、日本の魅力と新しい価値の創造について、文化戦略を中心に話を進めたいと思います。まずは私の方から、議論する三つのポイントを提起します。一つめは、日本の素晴らしい文化を世界に伝えること。世界に認められることによって日本文化が異文化と融合し、新しい文化を生み出していくのではないか。二つめは、伝統文化や伝統工芸といった守るべき固有の文化について。三つめは日本の文化を日常生活の中で楽しむということ。美術館や博物館に行くのもいいのですが、もっと身近に親しむ文化も大切ではないかと思います。日本人の価値観も含めてお話しいただければと思います。

谷内　昨年の東日本大震災では多くの方々が犠牲になられました。それでも被災された人たちは、自分のことを後回しにしてでも家族、隣人、会社の同僚、地域の人たち全体を考えて、大変立派な行動をされました。町の職員が「高台に避難してください」と最後まで放送を続け津波にさらわれ亡くなられたことなど、さまざまな行動が日本のみならず世界中に大きな感動を呼び起こしました。世界の人々が日本人の素晴らしい国民性を再確認したと思います。誠実、真面目、約束を守る、規律を大切にする、あるいは惻隠の情など、これらはいずれも新渡戸稲造の『武士道』に書かれているものです。また、思想家の渡辺京二の著書『逝きし世の面影』には、幕末の頃に訪れた外国の知識人が見た、古き良き日本の庶民生活への賛辞や感想が綴られています。こうした素晴らしい国民性が大変高い評価を得たということです。

東日本大震災では160か国近くの国々から支援の申し出がありました。隣国の台湾からは200億円以上の寄付金が政府からではなくプライベートな支援として寄せられました。なぜなのかと考えると、一つは戦後の日本が平和に徹し、諸外国に経済や技術協力などの支援を惜しまなかったからです。日本はよくやってくれたということへの評価です。もう一つは、この大災害にへこたれることなく引き続き国際社会に貢献してほしいという激励の思いが込められていると思います。われわれはそれを重くかつ大切に受け止める必要があります。この素晴らしい国民性は文化の一つなのです。長い歴史の中で培われ、多くの若者が被災地でのボランティア活動に参加するなど、日本の素晴らしい文化・国民性は現代にも受け継がれている。これは日本という国、そして日本人に対する世界の信頼感を非常に高めたと思います。

私は文化戦略という言葉には若干の違和感があり、文化を使って国益を追求するのは邪道ではないかと思っています。人間同士のふれあいのツールとして文化は大切なものであり、そのことで日本への信頼が高まれば、これは外交面で非常に強い基盤になると思います。今回の東日本大震災で示された日本人の国民性は、文化戦略ではなく、あえて言えば事実の実証として世界に大きなインパクトを与えました。日本は、アメリカをはじめ多くの国々の立派なパートナーであり得るということを強く示したであろうと思っています。

東日本大震災での自衛隊への評価

国分　東日本大震災は日本にとって大きな悲劇ですが、谷内さんの言うとおり日本の良い面を見ることができたと私も思います。社会の成熟という意味です。従来、あまり光が当てられてこなかったセクションでも日本は非常に進歩し、厚みがあり、活力があることを発見したことです。東北の農村・漁村の生産力や地域力、世界各国に部品を提供している中小企業の技術力、若者たちのボランティア精神、警察、消防、海上保安庁、そして自衛隊もその一つです。被災地における自衛官たちのヒューマンな行動はその瞬間にできることではなく、地道に一つ一つ積み上げてきた成果です。それを国民は今まであまり目にする機会がなかったのです。

自衛隊に対する国民の評価については、最近の内閣府の調査で92%が好意を感じる、東北大震災での活動に関しては98%の方々が評価するという結果が出ています。もちろん自衛隊はこれに奢ってはいけない、この評価が震災という一面だけで終わってはならない、これからも地道にやるべきことをきちんとやっていこうと気を引き締めています。

先日、米軍のある将校と話をしていましたら、日本の自衛官は町に出るときに制服を脱がなければならないが、そういう文化とはどうなのだろうかと言うのです。欧米社会では軍人は外出時も制服を着用していて、市民社会を構成する一員と認められ融け込んでいます。日本では複雑な要因があり実現されていませんが、今回の大震災でようやく市民社会の構成員の一人なのだと認識いただけるようになったのではと思います。

佐藤　自衛隊の活躍も素晴らしかったのですが、仙台空港をわずか1か月で復旧させたアメリカ軍の『TOMODACHI作戦』も忘れてはなりません。仙台商工会議所は、オバマ大統領に対して感謝状を出したことを付け加えておきます。

新しい国を興す気概

大林　ここで視点を変えまして、企業文化という観点から経営者として佐藤さんからご意見を伺います。

大林剛郎氏

佐藤　大阪商工会議所の企業家ミュージアムに行きますと、非常に勇気づけられます。パワースポットなのです。大阪経済の基盤を築き、さらに多彩な文化事業を行った名経営者たちの理念や考え方を記した資料や著書が収蔵されています。そこに行くと考えさせられるのが、国家と経済界との関係です。円高やデフレ、電力問題などで国内の産業の空洞化が進んでいますが、海外に進出している企業の方々は決して日本を見捨てているわけではないと思います。中国の初唐時代、後世に治世の鑑といわれた太宗皇帝と群臣が政治を論じた『貞観政要』の中に、「創業と守成はいずれが難き?」という問答があります。結論として「創業は易し、守成は難し」ですが、ただ守っているのではなく、守成の企業ほど創業の精神を発揮させなければならないと思います。日本は先進国ですが、国も経済界ももう一度、新しい国を興すのだというくらいの気持ちをこの時代にこそ持ちたい。そこから力強い企業文化も生まれてくると思います。

佐藤茂雄氏

大林　企業家ミュージアムで紹介されているような素晴らしいリーダーは、経済界でも少なくなっているのではと思います。それが日本の弱みになっているのかもしれません。いずれにしても日本の文化を世界に発信していく、その発信力を強化するためには今、何が必要なのでしょうか。

谷内　そもそも国際社会において、日本がリーダーシップを発揮することは可能なのか。私は、それを可能にする条件は最低三つあると考えています。まず国力があること。次に国家としての発言と行動が一致しているという信頼感。そして最後が、普遍性をもったメッセージを世界に発信することです。これは広い意味で文化をも含むソフトパワーです。日本はこの三つの条件を満たしていると思うのですが、日本人は謙虚で、私たちはこんなに素晴らしいのだとあまり主張しない国民性ですから、十分に伝わっていないように思います。もう一つ、日本は顔が見えないということを外国の方々からよく聞きます。国のリーダーである総理大臣が1年ごとに替わるという事情もあるでしょう。第2次世界大戦時のイギリスの大物政治家、ロイド・ジョージは、「国民は政府に明確な目標があり指導力があれば犠牲を受け入れる。ただし指導者自らが犠牲を覚悟しなければならない」という言葉を残しています。私は、こうした姿勢が政治家や指導者には必要だと思います。つまり、命がけでや

るということを国民に理解させることができれば、国民は自ら犠牲を受け入れる。私はそれが日本人の国民性だと思います。

佐藤　たとえば日本も移民政策を取り入れてはという議論がありますが、多様性を統一していくには、国造りのビジョンやトップリーダーの資質をしっかりと整えなければ無理でしょう。その副読本として福沢諭吉の『学問のすゝめ』はどうでしょう。

国分　『学問のすゝめ』は、文頭の「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」ばかりが強調されますが、大切なのはそれに続く文章です。要約すれば「しかし世の中には賢い人、愚かな人、富める人も貧乏な人もいる。その差はどこにあるのか、それはまさに学ぶか学ばないかにある」と。彼が強調したいのはそこなのです。

明確なビジョンのもとで個性は生きる

国分　この会場には大学生の方もたくさん来られています。この時期、大学4年生は就職活動で戦々恐々としている状態です。私は30年の大学教師生活で、学生たちに一貫して「君たちのミッションは何だ。生きている理由は何だ。個性とは何だ。それを大学の4年間で考えろ」と語ってきました。ところが日本の多くの学生は、就職活動がスタートしてからそれに気づくのです。自分は何がしたいのか、自分の個性とは何か、どんな会社が自分に合っているのかと、慌てるのです。防衛大学校という職場に移り、私は新しい発見をしました。この大学の学生たちのミッションは明確です。国家を守り、国民の平和と安全を守ることです。そのミッションはとても重いものですが、はっきりとしている。そこから自分の人生とはなにか、個性とはなにかを探していくのです。明確なビジョンや目標があれば一人ひとりの個性がより生きてくるのです。今、難しいのは国家の将来ビジョンが不明確なことです。だから国民の個性が十分に生かされていないという気がします。同様に、民間企業も国や国民を意識した形でのミッションを打ち出すと、若者たちも自分の人生と結びつけやすくなるのではと思います。

地域に文化を生み出す活力を

萩尾　私は、文化というのは個人に属するもので、国家が文化はどうあるべきかと口を挟むのはあまり賛成できません。しかし、発信力のある地域文化をつくるためのインフラ整備は、やはり行政と経済界が協力して担わなければなりません。ご存じの通り、今は東京一極集中化が進み、地域行政の権限や財源が減り、経済界でも本社機能が東京に移行しています。これでは関西はもちろん、地域の中枢機能は弱まり、活力は生まれません。文化の発信力も弱くなっています。しかしやれることもあるはずです。たとえば今、開発が進んでいる梅田の北ヤードはバブル崩壊のまっただ中で関西経済同友会が提言し、大阪市や政府を動かしました。関西経済同友会は、道州制によっても早くから権限や財政を地域にシフトし、地方の自立を認めてくれと主張しています。文化の発信を考えるにあたっては、そうしたことも考えるべきだと思います。

萩尾千里氏

文化の融合と摩擦

大林　文化の融合、つまり積極的に異文化を取り入れていくこと、そして日常生活での文化の楽しみについて議論を進めたいと思います。文化を融合させるとなると、当然ながら摩擦が生じますが、それをどう乗り越えていけばいいのか、ご意見を伺います。

国分　文化は衝突する側面も融合する側面もあります。摩擦の中で融合していく事もあり、それを怖がることはないと思います。国際化の議論の場では、日本は相手を理解するのは得意だが日本を理解させるのは苦手だという話がよく出ます。今後はこれを習練していかなければなりません。これからの時代を生きていく人にとって、英語力は必須です。そのためには学校教育の早い段階から英語力を鍛えるべきだし、教育方法を変えるべきかもしれません。

谷内　大衆文化での融合という観点で言えば、韓流ドラマを見ていると、ハリウッド映画や日本の古いドラマの影響を受けているように感じます。一方、最近の日本のドラマも韓流ドラマの影響を受けている。韓国はハリウッドや日本の手法を学び、さらに魅力を付け加えて発信する。それを今度は日本が学ぶ。お互いに切磋琢磨しながらいい融合ができているのではないでしょうか。

佐藤　先日、在大阪韓国総領事とお話したところ、韓国はしっかりとした戦略を持って文化を発信しているとおっしゃっていました。自国の文化をそのまま輸出するのではなく、日本のマーケットに合うように制作するそうです。おしきせではなく、相手国にいかに合わせ喜んでもらえるかという、したたかな戦略が必要だということを知りました。文化は芸術、食、祭り、観光など幅広いジャンルをカバーしています。能動的な平和創造国家として、さまざまな分野の文化力を信じて諸外国との友好関係を築いていきたいと思います。

谷内　時代を超えて評価される文化財を創造するという

谷内正太郎氏

観点で言えば、クラシック音楽や西洋の古典絵画は貴族や富裕層が育ててきました。日本で世界に通用する新しい文化が生まれにくいのは、才能が枯渇したわけではなく、私は一つには相続税に問題があるのではないかと思っています。やはり大金持ちがパトロンとなって才能ある人を育てるという文化がないと、優れた絵画、文学、音楽なども出てきにくいのではないかと思っています。

国分　大学教授としての実感としては、若者の力を信じた方がいいと思います。若者たちが力を発揮しやすい環境をつくることが重要です。そして文化は社会の中で醸成され、それは自分自身を感じるもの、つまり帰属意識であると同時に融合しながらさらに高めていくものです。そういう意味で、東アジアは政治的な問題がこれからも多々あると思いますが、だからこそ文化や経済で緊張をほぐしてもらうことも重要です。安全保障の問題は依然としてありますが、そのような営みがいつかは政治を変えていくことにつながるかもしれません。

「情」が感じられる文化交流を

萩尾　今はグローバル化によって国の垣根が非常に低くなりつつあり、アジアの国々からもさまざまな文化を持った文明が次々と現れ、文明の多元化が起こっています。われわれはその中で混ざり合い、異質な面を認め合い、あるいは評価する。私は、そうして共存する努力をしていかなければ、グローバル化時代は危ないと思っています。突き詰めると、人と人がお付きあいして、「情」を感じることだと思います。

先日、日中友好協会の中国の新会長、唐家璇（とうかせん）氏が挨拶のために来日され、東京より先に大阪に来られました。なぜかというと歴史的に見て関西が日中友好に大きく尽くしたからです。戦後、真っ先に訪中団を派遣して友好親善の役割を果たしたのは関西財界でした。それに対して敬意を表するためだとおっしゃいました。そういう情があってこそ親しみが生まれ文化の交流が起こり深まっていく。私はそういうものを政府だけでなく民間も積極的にやっていく時代に来ていると思います。情のある交流を大いに促進して相互理解を図っていくことが大切だと思います。

大林　本日の議論を踏まえて、中国をはじめ急成長する東アジアとどのように付き合っていくか。各国の多様性を理解しつつ、異文化との融合をはかり新たな価値を創造、発信していくことが必要です。また、日本人が生活の中でもっと文化を楽しむ風土を醸成することも大事なことだと思いました。ありがとうございました。

パネリスト

国分良成（こくぶん　りょうせい）　防衛大学校長
1953 年東京生まれ。81 年慶應義塾大学大学院政治学専攻博士課程修了。同大学教授、東アジア研究所を経て、2007 年同大学法学部部長兼大学院法学研究科委員長、12 年より現職。編著書に『中国は、いま』（岩波新書）など。

佐藤茂雄（さとう　しげたか）　京阪電気鉄道（株）取締役相談役　取締役会議長
1941 年生まれ。65 年京都大学法学部卒業。95 年京阪電気鉄道取締役、99 年常務取締役、2001年代表取締役社長、07 年代表取締役 CEO　取締役会議長、10 年大阪商工会議所会頭、11 年より現職。

萩尾千里（はぎお　せんり）　（株）大阪国際会議場　代表取締役社長
1937年熊本県出身。60年関西大学商学部卒業。69年朝日新聞社入社。87年関西経済同友会 常任理事・事務局長、2006年より現職。関西大学客員教授、復旦大学（上海）客員教授、大阪大学非常勤講師、海南大学客員教授などを歴任。

谷内正太郎（やち　しょうたろう）　元外務事務次官
1944 年石川県生まれ。69 年東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了、同年外務省入省。総合外交政策局長、内閣官房副長官補等を経て、2005 年～08 年、外務事務次官。編著書に『外交の戦略と志』（産経新聞出版）など。

（50 音順・敬称略）

コーディネーター

大林剛郎（おおばやし　たけお）　（株）大林組　代表取締役会長
1954 年生まれ。77 年慶應義塾大学経済学部卒業。同年大林組入社。80 年スタンフォード大学大学院修了。85 年大林組常務取締役、87 年専務取締役、89 年代表取締役副社長、2009 年より現職。11 年関西経済同友会 代表幹事。

関西の文化力向上

Session 2

長い歴史のなかで連綿と培われてきた関西の文化を、守り、育て、社会の活力の源泉とするためには、いま何を考え、どう行動するべきか。過去の教訓や海外の文化施策などから、その答えを探った。

大竹伸一氏
西日本電信電話
代表取締役社長

小出英詞氏
住吉大社権禰宜

近藤誠一氏
文化庁長官

鳥井信吾氏
サントリーホールディングス
代表取締役副社長

（50音順）

コーディネーター
堀井良殷氏
関西・大阪21世紀協会
理事長

文化・芸術の六つの力

堀井　日本の伝統文化の多くは関西で発祥し、今なお残されているのも関西です。にもかかわらず最近とくに大阪においては、こうした文化の危機的状況を日々見聞きします。文化を培うには長い年月が必要ですが、潰そうと思えば一瞬で潰れてしまいます。だからこそ文化を絶えず論じて育てていかなければなりません。パネリストの皆さんは、現在の日本とりわけ関西の文化状況についてどのような課題意識をお持ちでしょうか。

大竹　経済界はこれまで、文化と経済は別個のものであると捉えてきました。しかしそれでは文化力は向上しません。文化を生活に根ざしたものとして経済活動とセットで考えるべきだと思います。そうした『文化経済大国』の実現に向けた戦略的な取り組みによって、日本の新しい価値が創造されると思います。関西はその拠点になるでしょう。

鳥井　私は関西経済同友会の歴史・文化振興委員会で、文化による大阪の活性化について調査・研究をしています。その観点で言えば、日本の文化の根源には、マハティール元首相が基調講演でおっしゃった通り、勤勉さや規律正しさ、高い労働倫理があると思います。

小出　住吉大社の1800年にわたる歴史は、単に一つの神社の歴史ではなく、関西・大阪の歴史の一部でもあります。まずはそれを再認識していただき、大阪の伝統文化である「お祭り」を文化振興に役立ててはどうかと考えます。

堀井　本日は東京から近藤誠一文化庁長官にお越しいただきました。近藤長官は、外交官としての長いご経験をお持ちです。外国と日本の文化に対する取り組みについてどのようにお考えでしょうか。

近藤　私は38年半の外交官生活を終え、1年半前に文化庁へまいりました。この約40年間のうち、半分が外国、半分が日本で生活してきました。本日は、文化庁長官としての建前ではなく、そうした40年間の社会人人生で深く感じたことをお話しいたします。

経済成長や安全保障による国の繁栄は大事なことですが、それは精神的な豊かさを楽しむための条件整備であり、手段に過ぎません。ところが戦後日本は、経済的に成功して「ジャパン　アズ　ナンバーワン」と言われたがために、経済成長自体が目的化してしまいました。バブル崩壊後もその考えを切り替えることができず、今日に至っていると思います。そうして世界第3位の経済大国となり、安全を手に入れて、精神的な豊かさを追求する条件が揃ったにもかかわらず、そのために必要な、子どもたちに芸術の素晴らしさを教え、文化の力を自分の力にする仕組みをつくることを怠ってきた。その結果、人々の生活に文化・芸術が十分に位置付けられず、経済が停滞しているという理由だけで、日本人は必要以上に元気を失ってしまいました。

近藤誠一氏

文化・芸術には六つの素晴らしい力があります。一つめは感動や悩み、祈り、感謝の念などを表現し、それを他人と共有する力です。ある文化人類学者よれば、ネアンデルタール人が滅んだ原因は、自分の気持を表現できず仲間とうまくコミュニケートできなかったからだそうです。

二つめは、芸術に感動することで生きる力と希望が得られることです。分子生物学の大家である筑波大学の村上和雄名誉教授によれば、物事に感動することで良い遺伝子が目覚め、病気を治す力が沸いてくるそうです。アメリカの糖尿病学会でも、笑うことで糖尿病患者の血糖値が下がることが証明され、注目されています。

三つめは、芸術が社会の統合の力になることです。私はロンドンでシェイクスピア劇の『リア王』を観て、リア王役の黒人俳優の演技に感動した経験があります。ブレア元首相は、アフリカなど旧植民地から移民を受け入れるにあたって、芸術分野での活躍を奨励しました。移民のなかには英語が多少苦手でもダンスや歌、演技などでは一般のイギリス人よりはるかに優れた人がたくさんいる。イギリスでは、そういう人たちを芸術の世界に参加させることで彼らに生き甲斐を与え、かつ国の文化力をも高めているんです。

四つめは、芸術には固定観念や既成概念を突破する力があることです。芸術は政治や経済と違って既存の枠にとらわれません。日本の政治家や経済人、官僚は、こうした芸術的センスを見倣って新しい発想を追求すべきです。

五つめは、芸術を通して、産業や地域振興に必要なイノベーション能力が養われることです。ノーベル化学賞を受賞した野依良治博士は、「ノーベル賞を取ろうと思ったら、学術の積み上げだけじゃだめで、芸術をやってひらめきを覚えなさい」という主旨の話をされています。

六つめは、ソフトパワーとして国のイメージを上げることです。日本のアニメが海外で高い人気を得て、文化外交に寄与しているのはその好例です。

『和魂和才』を生かす

堀井　近藤長官のおっしゃる通り、経済的な豊かさは手段であって目的ではないんですね。大竹さんは先ほど文化経済大国を目指そうと言われましたが、それについてもう少

し詳しくお聞かせください。

大竹　大量生産・大量消費という欧米型の経済成長モデルは、すでに行き詰まりの感があります。そこで日本文化独自の強み、つまり日本人の心と技である『和魂和才』を生かした日本発の新たな経済成長モデルとなるのが、『文化経済大国』の考え方です。東日本大震災では、日本人の冷静さや忍耐、協調性といった精神が世界各国から称讃されました。こうした『和魂』と、創意工夫やおもてなし力などの『和才』を生かして心の豊かさを実現することが、今後の経済成長を牽引し、グローバリズムの中で日本の価値を高めることにつながるでしょう。

具体的には、海外へ陶磁器や染織品などの有形文化を輸出したり、和食や時間を守る習慣といった無形文化にも共感を得ることで、日本流の生活様式を世界に広めることができると考えます。実際、「もったいない」という『和魂』がリサイクルや省エネ、保存食などのビジネスを生み、「繊細」「器用」などの『和魂』が融合することで「ものづくり力」といった『和才』が生まれ、軽自動車やカメラなどの小型軽量化を実現しました。こうしたことは日本に限ったことではありません。アメリカではジーンズやハンバーガーなど、イギリスでは英語という言語やゴルフなど、自国文化を経済活動に取り入れ世界に発信することで経済発展をもたらし、国際的な地位の向上にもつなげているのです。

大竹伸一氏

堀井　大竹さんのお話を聞いて、梅棹忠夫さんが生前、「これからの日本は、日本文明を世界に広めていくという使命感をもつべきだ」とおっしゃったことを思い出しました。われわれが当たり前のように思っている暮らしは、じつは世界の人々が憧れる魅力的な暮らしなんだと。

さて、日本は明治以降、『和魂洋才』を掲げて今日の繁栄を築いてきましたが、洋才にばかり走って和魂を忘れたところに今日の閉塞感があると思います。そして和魂と言えば、そもそもその発するところは住吉大社に行き着くのです。

日本人のアイデンティティ

小出　『和魂洋才』の考えは、菅原道真が大和心をもって唐国の文物を取り入れることを『和魂漢才』と表現したことがはじまりです。この精神を体現したのが遣唐使で、彼らは住吉大社で祈願したのち、大阪湾から船で旅立っていきました。記録によれば、この遣唐使船のなかには、住吉神社を設えて神職も同乗したとあります。大陸の進んだ文明を取り入れる国家プロジェクトに臨んで、日本人のアイデンティティである神を祀っていたというのは大変重要な意味をもっています。

小出英詞氏

遣唐使による大陸との交流がなくなった後、住吉明神は和歌・文学の神としても親しまれるようになりました。例えば源氏物語は、その核心部分が住吉信仰で成り立っています。都落ちした光源氏は、再び中央政界に復帰すべく住吉明神に誓いを立て、そのお礼参りとして壮大な住吉詣でを行っています。伊勢物語にも登場し、古今和歌集には「すみのえの」とか「すみよしの」と付く歌が数多く見られます。また、かつて結婚式には付きものだった謡曲『高砂』では「はや住之江に着きにけり」と謡われ、「逢ひに相生（あいおい）の松こそめでたかりけれ」と、松の葉のように夫婦が生涯添いとげることを寿ぐ相生の思想もここから生まれました。

住吉大社は伊勢神宮と同じく20年に1度の式年遷宮制度があり、その際、当社のシンボルでもある太鼓橋は代々船大工が架け替える伝統があります。つまり八百八橋といわれた大阪の築橋は船大工の技術に負うところが大きく、その意味でも住吉大社は水の都・大阪とゆかりが深い。このように、大阪で「外交」「文化」「水の都」というキーワードを掘り下げていけば、住吉大社にいたるのです。

堀井　大阪には住吉大社をはじめ、神武天皇の時代からある生國魂神社や聖徳太子が建てた四天王寺など、数々の歴史遺産が現存します。そうした日本人の心に深く根ざした精神性を生かすことが大事だと思います。歴史を生かしたまちづくりを提唱する関西経済同友会　歴史・文化振興委員会では、2011年9月、イギリス・スコットランドの歴史を生かしたまちづくりを調査しました。調査団長の鳥井さんは、そこでどのような収穫を得られましたでしょうか。

大阪版アーツカウンシル

鳥井　イギリスの文化振興施策の特徴は、『アーツカウンシル』という第三者機関があることです。日本では文化への助成金は国や自治体、企業が各団体に直接配分しますが、イギリスではアーツカウンシルがお金を一旦預かり、各団体の規模や貢献度などを評価して分配します。また、『アームズレングス』という考え方が浸透しているのも特徴です。直訳すると「腕の長さ」ですが、これは、文化や芸術に対して国や自

治体は金を出すが口は出さない適切な距離を保つことを意味しています。アームズレングスが重要なのは、本来、政治家や官僚、企業経営者に求められる能力と文化の担い手に求められる能力は別物であるため、両者の間に適度な距離をおかなければ文化は発展しないからです。

私は、ユニークな製品やサービスを生むには、芸術的な創造力が必要だと思います。技術と文化は経済を支える車の両輪なんですね。マイクロソフトやアップル、グーグルなどに代表されるアメリカの先端企業には、ポップアートなどのアメリカ文化が土台にあります。私どもサントリーの例で申し上げますと、創業者の鳥井信治郎は根っからの商売人でしたが、清元など日本的な趣味がある一方、西欧のデザインへの憧れや探究心も人一倍強い人でした。毎月丸善から海外の雑誌を取り寄せ、それを切り抜いてスクラップしてはデザインを理解しようと努めていました。そうした探究心から、赤玉ポートワインをはじめウイスキーやビールの斬新なデザインが生まれ、日本で初めて水着モデルをポスターに起用するなど、話題になりました。

さて、大阪における文化振興については、イギリスのアーツカウンシルの仕組みを取り入れてはどうかと考えます。もとより行政や企業から出されるお金の配分は公平と平等が原則であり、お金が申請どおりに使われているか評価することも重要です。しかし、そもそも文化というのは無駄で非効率な面もあります。私は、このバランスを担って機能するのがアーツカウンシルだと思います。さらに、「こんな素晴らしいアートがある」と知らせる企画・広報活動も必要です。お客様を集めたり、アーティストをメディアに売り込んだり、あるいは若いアーティストを発掘して育成する。そうしたマネジメントも兼ねた大阪版アーツカウンシルが必要だと思います。

鳥井信吾氏

堀井　フランスやイタリアでは、文化への国家からの支援が非常に大きなウエートを占めています。文化を国家の命題として正面から捉えているのです。一方、アメリカでは、行政は一切文化に関わらず、民間が支援しています。その代り文化に対する寄付は税制上非常に優遇されています。スコットランドはその折衷型というか、国や自治体の助成金と企業の協賛金や市民の寄付、さらには文化支援宝くじの発行など、官民による総合的な文化支援システムであり、そのなかでアーツカウンシルが非常に大きな役割を担っています。各国それぞれ特徴があるのですが、翻って日本はどうなのでしょうか。

芸術鑑賞が社会の力になる

近藤　各国の国家予算に占める文化予算の割合（2009年）を見れば、アメリカ0.03%、イギリス0.24%、フランス0.81%、ドイツ0.39%、韓国0.73%といずれも比較的少ないです。とくにアメリカは堀井さんがおっしゃったように政府支援はゼロに近く、民間の寄付で賄っている。逆にフランスと韓国は政府がかなり支援している。これはどちらが良いということではなく、政府ないし民間が必要なお金を文化・芸術に回せば良いということです。

一方、日本では、政府の文化予算は0.12%で、GDPに占める寄付の割合も0.13%と非常に低い。これでは日本の文化力が世界に浸透しません。ではどうしたらいいのか。お金を出すのは政府か自治体か、それとも民間企業か財団の寄付か。私は最終的に文化・芸術にお金が必要なだけ行き渡りさえすれば、それがどこから出ようとかまわないと思います。ただし、伝統芸能のように必ずしも多くの一般人や若い人に好かれているわけではないものを維持するためには、やはり国や自治体がお金を出して守るべきでしょう。

問題は助成金をどうやって適正に配分するかですが、文化庁でも2011年からアーツカウンシルに相当する制度を導入しました。文化庁は日本芸術文化振興会に助成金の一部の配分を委託していますが、その配分を文化庁が決めるのではなく、アームズレングスの考えに則って実質的に専門家が決めています。今後はこうしたシステムを広げ、公的資金がより一層適正に配分されるようにしたいと思っています。

大阪府がアーツカウンシルを導入されるのは大歓迎です。その際は政治的中立性が大事で、知事や市長が交代しても必要なところに必要なお金が回るようなシステムであるべきです。また、何より国民一人一人が芸術・文化を大切にし、それを生活のなかに取り入れ楽しむべきでしょう。パリやニューヨークでは、定時に仕事を終え、「これからオペラに行く」と言えば皆喜んで送り出してくれます。これを日本の職場で言えば、シラッとした雰囲気になりそうですね。文化を楽しむことは単に個人の趣味ではなく、社会の力になるんだという意識改革が必要だと思います。そうしないと文化にお金が集らないし、集ったお金をうまく利用することもできません。日本には文楽、能・狂言、歌舞伎といった素晴らしい伝統文化があるのに、それを支えようという一人一人の意識が低い。定時に仕事を終えて芸術・文化を楽しむ生活が、日本の再生につながると思います。

なぜ文化を楽しまないのか

堀井　かねがね疑問に思っていたのですが、江戸時代末

期から明治時代にかけて来日した外国人は、日本人の素晴らしい美的センスに驚嘆したそうです。ヨーロッパを中心にジャポニズムという日本文化ブームも起りました。そうした日本が、なぜかくもわずかな文化予算しか捻出できない国になり、生活のなかに芸術・文化を鑑賞する習慣が根づかなくなってしまったのでしょうか。

堀井良殿

近藤　理由は二つあると思います。一つは明治の富国強兵策と戦後の経済成長優先策の行き過ぎによって、文化を楽しむのはお金儲けの後でいいという考えになってしまったこと。二つめはクラシック音楽や油絵などの西洋文化を取り入れることが主眼となり、学校教育でも日本の伝統的な音楽や芸能などが隅に追いやられてしまったことです。そのため伝統文化を理解するチャンスが与えられず、語る場もなくなってしまった。だから文楽を一度見て面白くなかったというだけでその価値を認めないような市長さんが生まれる国になってしまった。じつに残念なことです。

堀井　強兵策は戦争で、富国策はバブル崩壊で結局失敗しています。その結果が現在の混迷状況なのですが、『和魂和才』で再出発して、新しい時代をつくる今が節目かもしれませんね。

近藤　同感です。ただし和魂和才は大いに結構なのですが、あくまで近代モダニティの中で日本の良いところだけを復活させるよう注意しなければなりません。かつて『近代の超克』（1942年に雑誌『文学会』のシンポジウムで主張された、近代西洋文明が日本の閉塞感を生んでいるという問題提起）が、極端なナショナリズムによって日本文化を世界に広めようと意気込み過ぎ、欧米との戦争を正当化してしまったことを教訓とすべきです。大事なことは、西洋近代と日本古来の魂の両方の良いところを一緒にすれば、こんなに良い社会ができるんだということを日本人自ら実践してみることです。

堀井　教訓を生かし新しい道を拓こうということですね。大竹さんは、文化経済大国への道を拓くために、具体的にどのような取り組みをすればよいとお考えでしょうか。

日本文化を関西から世界へ

大竹　関西には、日本の国宝の約半数、重要無形文化財保持者（人間国宝）の約2割、文化財の保存技術者の約6割がいます。関西は日本の歴史・文化の集積地であり、内外に発信できる特別な立場にあるわけです。こうした背景から、私は、文化経済大国の実現に向けて関西が取り組むべき四つの提案をいたします。

一つめは、日本語だけの『KANSAI・日本文化サミット』の開催です。2006年に『日本語・日本文化世界会議（NPOジャパン・リターン・プログラム）』の第1回がカイロで開かれ、第2回（2007年）は北京、第3回（2011年）は東京で開催されました。こうしたサミットを関西で開催することで、世界に日本文化ファンを増やしていこうという提案です。二つめは、日本文化を内外に発信する『和使（わのつかい）』を育成する組織の設置です。三つめは、関西国際空港を日本文化のゲートウェイとし、ここに伝統芸能や和室、庭園など、日本の文化や生活様式が体験できる環境を作ってはどうかと考えます。四つめは、文化庁や文部科学省といった文化政策を担う国の機関を一部関西に移し、文化経済活動の中心を関西が担うことです。日本の歴史・伝統の象徴ともいうべき皇室の方々にも、一部関西にお移りいただいても良いと思います。東京に集中している現状では、大地震による甚大な影響が危惧されますからね。

堀井　ご提案の中からまず何か一つでも実現できればいいと思います。鳥井さんは具体的にどのようなお考えがおありでしょうか。

大阪城フェスティバル

鳥井　イギリスの文化振興視察では、スコットランドの首都・エジンバラで毎年開催される『エジンバラ・フェスティバル』も調査しました。当地では1年を通して音楽やアート、科学など12のフェスティバルが行われ、7～8月にピークを迎えます。町のシンボルであるエジンバラ城を中心に歴史の趣きを感じる旧市街で5つのフェスティバルが同時開催され、期間中は人口48万人の町が100万人に膨れ、約175億円の経済効果と5,420件の雇用が創出されるそうです。国際的な知名度も高く、世界中から約2万人のアーティストと2,000人のメディア関係者が集り、1,000人近

エジンバラ市街

いプロデューサーが新人発掘のためにやってくる。さらに自由参加、自主公演のフリンジ（周辺）フェスティバルがあり、若いアーティストの恰好の発表の場となっています。彼らにとって発表の場は非常に重要で、フェスティバルがアーティストを育てる良い機会となっています。

アーツカウンシルが芸術・文化へお金を分配するのは良いのですが、アーティストにとって発表の場がないと意味がありません。私は、大阪には大阪のシンボル、大阪城があるのですから、これをもっと活用して、芸術・文化の発表の場となる『大阪城フェスティバル』の開催を提案いたします。

堀井　じつは7年前から、大阪城サマーフェスティバルの一環で、大阪城西の丸庭園に特設舞台を組み、ライトアップされた天守閣をバックにコンサートや演劇を上演する社会実験を行っています。また、大阪の夏といえば住吉大社の御田植神事をはじめ、枕太鼓で知られる生國魂神社の夏祭りや生根神社のだいがく祭りなど、長い歴史のなかで連綿と続く祭りがあります。こうした伝統祭事や新たな創作活動がバラバラに存在するよりも、エジンバラ・フェスティバルのようにまとめて結び付けることで大きな文化力となり発信力も高まるでしょう。今日の会議がそのきっかけになればと思います。

神が宿る日本の伝統文化

小出　地域の祭りは、人と人を結び付けるコミュニケーションの一つだといえます。農村にしろ、町にしろ、かつてはその中心には氏神様がいて、それを中心に人々がつながりをもっていました。しかし戦後、政教分離という言葉が一人歩きして、宗教と公の行事を分けるという意味が曲解されてきました。宗教という概念はもともと日本にはなく、海外から入ってきた概念にすぎません。狂言や能などの伝統芸能や、刀鍛冶のような伝統技術には神を奉る動作がありますし、相撲でも行司が土俵をお祓いします。つまり日本の伝統文化と神事は密接な関係にあり、文化をもって内外に発信・交流しようとする今こそ、日本人のアイデンティティである『まつりごと』を再認識しなければならないと思います。

住吉大社の御田植神事（2011 年 6 月 14 日／大阪市住吉区）

堀井　「面白い」という言葉は、「神様の顔（面）が白く見える」に由来し、神様に降臨して楽しんでいただくため、演技を奉納するという意味があるそうです。芸事の出発点には、やはり神様がおられると思います。

そこで、本会議でのご提言にもとづく合意事項を『中之島宣言』としてまとめ発表させていただくのですが、今回は住吉大社のお祓いを受けて和泉流狂言師の小笠原匡さんから奏上していただきたいと思います。

（『中之島宣言』は次ページに掲載）

パネリスト

大竹伸一（おおたけ しんいち）　西日本電信電話（株）代表取締役社長
1948 年愛知県生まれ。71 年京都大学工学部電気工学科卒業後、日本電信電話公社入社。2007 年西日本電信電話（株）代表取締役副社長戦略プロジェクト推進本部長を経て 08 年より現職。10 年関西経済同友会 代表幹事。

小出英詞（こいで えいじ）　住吉大社権禰宜
皇學館大学文学部神道学科卒業。住吉大社で神職を務める一方、地域の歴史・文化を広める活動を精力的に展開。郷土史サークルや町歩きイベントにも関わり、数々の講演活動を行う。社報や地域誌などにも多数執筆。

近藤誠一（こんどう せいいち）　文化庁長官
1946 年神奈川県生まれ。71 年東京大学教養学部教養学科卒業。72 年外務省入省。73～75 年英国オックスフォード大学留学。在米国大使館公使、ユネスコ日本政府代表特命全権大使等を歴任。2010 年 7 月より現職。

鳥井信吾（とりい しんご）　サントリーホールディングス（株）代表取締役副社長
1953年生まれ。75年甲南大学理学部卒業、79年南カリフォルニア大学大学院修了。83年サントリー入社、2003年副社長就任、現在に至る。サントリー芸術財団代表理事、関西経済同友会 歴史・文化振興委員長、12年5月関西経済同友会 代表幹事。

（50 音順・敬称略）

コーディネーター

堀井良殷（ほりい よしたね）　（公財）関西・大阪 21 世紀協会理事長
1936 年奈良県生まれ。1958 年東京大学卒業、同年 NHK 入社。ニューヨーク特派員、大阪放送局長等を歴任、2001 年より現職。水の都大阪再生運動を提唱・推進。心学明誠舎理事長、関西経済同友会 水都大阪推進委員長、大阪文化祭賞運営委員会会長等。

特別公演で『三番叟』を奏上
和泉流狂言師 小笠原 匡さん

関西・大阪文化力会議のパネルディスカッション終了後、特別公演として和泉流狂言師の小笠原匡さんに、狂言『三番叟（神楽式）』と、当会議での合意事項『中之島宣言』を奏上していただきました。

関西・大阪 21 世紀協会はこれを広く市民や行政、企業などに呼びかけていきます。

小笠原匡さん
公益社団法人 能楽協会会員 大阪支部所属
日本能楽会会員 重要無形文化財総合指定保持者

中之島宣言

参らせ候　参らせ候。敬って申す。

それ東アジア諸国は　其多様性が故　様々な危うさを孕むもの也。安定と平和の為には　日本は広く海外に目を向け　他国の多様性をしかと心得るべし。文化交流を育み　相互理解を深める事　いとやむごと無き　事也。

まった　市場主義一辺倒なる事無く　とこしえより培いし　日本の心を呼び起こし　震災復興　企業の営みに生かすべし。是こそ日本の魅力。他国に理解せしむは　是　世界から敬愛される国作りの戦略なり。

古への昔より　文化・芸能には神々が宿り　国や都市　まちを元気にする力あり。　民が文化を楽しむまち作り　いと　肝要なり。都市は舞台なり。我が国発祥に由来す上町台地　大阪城に万国より歌舞音曲に秀でたる者集いし舞台を創る事　天地も共に是を喜び大阪蘇りし術なり。

「民」は　町衆精神を発揮し　文化を支える元手集めの仕組みをつくる。

また「お上」は　支援はしても物は云わぬ「不即不離の隔たり」を保つなり。これぞ官・民円満の秘訣なり。

此如く浪速の地より事始め。
萬民ともに力をつくすべし。
萬民ともに力をつくすべし。

平成二十四年四月二十五日
関西・大阪文化力会議

大阪21世紀協会賞受賞　河野里美さんの作品を展示

会場となった大阪国際会議場 10 階ロビーでは、影絵アーティストの河野里美さんの作品が展示され、来場者の目を楽しませました。河野さんは、アートストリーム 2011 in 心斎橋で大阪 21 世紀協会賞を受賞。当会議のポスターやプログラム用の作品も制作していただきました。関西・大阪 21 世紀協会は、優れた新進アーティストに、こうした発表の機会を得ていただくなどの支援を行っています。（p29 に記事）

河野里美さん
大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業後、2005 年より独自でカラー影絵の創作活動を開始。個展、広告、映像制作、ワークショップなどで活躍。大阪府在住。

関西・大阪の魅力向上へ
～中之島宣言

当協会創立30周年記念事業として4月25日に開催した『関西・大阪文化力会議』は、基調講演やパネリストに著名な論客を迎え、のべ1,600人の参加者を得て有意義に終えることができました。関係各位のご協力に感謝したいと思います。

とくに文化は生きる力の源泉であり、イノベーションを生む力ともなり、経済発展のためにも不可欠であること、多様な文化の交流、融合から創造が生まれ、文化などのソフトパワーが世界の平和と安定のために極めて重要であること、和魂和才の発祥の地である関西・大阪を起点として文化経済大国をめざすべきことなどが改めて確認されたことは、大きな意味を持つと考えます。これを単なる会議で終わらせることなく、『中之島宣言』で提案された内容を実際に具現化して関西・大阪のために生かして行かなければならないと考えています。

大阪城を舞台に世界的なフェスティバルを！

一つ目は、大阪のシンボルである大阪城を中心に世界から注目されるようなフェスティバルを創出することです。

当協会は「大阪城サマーフェスティバル」として、すでに７年にわたる社会実験を行っています。このイベントは大阪城周辺で実施される様々なイベント主催者が集い、各イベント間の連携を図りながら、官民一体となった共同PR等を通じて、「大阪城のブランド力の向上」「大阪の芸術文化の情報発信力強化」「大阪の賑わい創出と観光集客の促進」のために始まりました。

今年度は、さらに新たなプログラムを幾つか加えて、内容の一層の充実を図るほか、フリンジ（周辺プログラム）を実施することで賑わいを増し、前年以上の集客を目指してスタートします。この「大阪城サマーフェスティバル」をベースに、世界的なフェスティバルへと飛躍させたいと願っています。

大阪城サマーフェスティバル 2010
「アノインテッド・マス・クワイヤー」

アーツカウンシル設立の実現に向けて！

二つ目は、アーツカウンシルの設立です。文化支援先進国である英国におけるアーツカウンシルの事例を参考にしながら、大阪版アーツカウンシルの創設に向けて検討をスタートします。

英国においては、「文化」は地域活性化、経済発展の役割を担うものとして明確に位置づけられており、文化振興・支援は「助成」でなく「投資」と扱われ、投資の目的や実施後の成果を明確にすることが求められています。また、政府や自治体のスタンスも「金は出すが、口は出さない」という「アームズ・レングスの法則が明解にあり、文化芸術の表現の自由と独自性が維持できています。

このような枠組みの中、エジンバラでは、世界遺産である美しい町並みや象徴であるエジンバラ城を活か

大阪城サマーフェスティバル 2010
西の丸庭園ステージの会場風景

大阪城サマーフェスティバル 2011
「浪華の夢～城を築くぞ、俺たちは」より紀州九度山真田太鼓

新たなミッションを始動!
を受けて～

公益財団法人 関西･大阪21世紀協会
理事長　堀井 良殷

して、世界的なエジンバラ・フェスティバルが開催されています。フェスティバル期間中は100万人以上の観光客で賑わい、その経済効果も1億4,000万ポンド（約175億円）と試算されています。

しかしながら、大阪の現状は長引く財政難によって文化事業予算は年々削減され、文化活動は一層厳しい緊縮を迫られています。一方、行財政の改革は待ったなしの状況であり、府民のみならず国民の多くが改革に期待を寄せているのも事実であります。

大阪版アーツカウンシルは、なにわ流に民間の力を主体に「タニマチ文化評議会（仮称）」として立ち上げていきたいと考えています。今後、具体的な制度設計を進めていきます。

また、当会議で提案された「和魂和才」「和使（わのつかい）」についても研究し、世界の文化サミットにもつなげてゆきたいと夢が拡がります。

エジンバラ・フェスティバル・フリンジでストリートパフォーマンスを行う大道芸人
（写真提供：Edinburgh Inspiring Capital）

エジンバラ城の広場で行われるミリタリータトゥーに集まったパフォーマーたち
（写真提供：Edinburgh Inspiring Capital）

文化の新たな地平を開く！

当協会は、今年４月に設立30周年を機に公益財団法人となり、名称も「大阪21世紀協会」から「関西・大阪21世紀協会」に変更して新たなスタートを切りました。

「文化は社会の活力の基本である」という理念を柱に据えて、新しい地平線を開いていくシンボリックな社会実験に取り組み、点を線に、線を面につなぎながら推進していきます。加えて、文化の底力となっている人たちを応援してまいりたいと考えています。

また、公益財団法人化にともない、当協会に寄せていただく寄付は所得控除の対象となりました。個人の方々にも呼びかけて関西・大阪の文化のために「志」を募るとともに、寄付をいただいた方には「こういう形で使いました」ときちんとフィードバックする仕組みをわれわれで作っていきたいと思っています。

伝統の上に
新たな創造を加え次代へ！

われわれが、本当に力を発揮するためには、自分たちはどういった土壌の上に生きているのかを知ることが大切です。われわれは突然今を生きているのではありません。長い歴史と伝統の延長線上に今があり、その先には次世代、次々世代の未来があるのです。現在は通過点にすぎず、我々は伝統の上に新たな創造を加えて、次世代に引き継いでいく責任があります。そのことで、関西・大阪の知名度と価値を向上させていくことこそが、われわれの存在価値であり使命だと思っています。

アートストリーム2011 in 心斎橋
大阪21世紀協会賞受賞

影絵アーティスト 河野里美さん
語りかけてくるような幻想的世界

不思議な感覚

きらめく波に乗って新天地をめざす満帆の船、大空を翔る極彩色の鳥、色とりどりの草花や木々。河野里美さんがつくる影絵の魅力は、その緻密で溢れ出るような美しい色使いと物語性にある。幻想的な作品世界に、大人は子どもの頃の夢を、子どもは未知なるものへの好奇心を呼び覚されることだろう。影絵の中に、別の世界が実在するかのような不思議な感覚。それは、作品自体が本当に“光”を放っているからこそ感じるものだ。

「暗闇のなかに明かりがあると安心する感じ。夜、帰ってきて家の明かりを見るとほっとするような。そんな安心感が好きなのかも」

そう話す通り、作品が放つ多彩な光からは、語りかけてくるような温もりや親近感が伝わってくる。

河野さんのカラー影絵に独特の質感があるのは、切り抜いた黒い紙の裏に、自分で染めた和紙などを貼って色を出しているから。トレーシングペーパーを重ねて微妙なグラデーションを表現するなど、“自分の色”の追求に妥協はない。歌舞伎の衣裳などからインスパイアされた幾何学的な模様を配することも。それらはすべて独学で会得した技法だ。旅行したり、好きなミュージカルを観たり、散歩中に見つけた草花の形など、日々の感動のストックを表現しているのだという。

創作パワーの源泉

河野さんが初めて影絵と出会ったのは高校3年生のとき。美大受験に備えて勉強をするなかで藤城清治氏の作品を知り、その世界観に魅了された。大阪芸術大学映像学科に進学してからは、アニメーション映画の制作に影絵の技法を取り入れたりもした。

本格的にカラー影絵の制作をはじめたのは大学を卒業した2005年。大阪市内の旅行会社に勤めるかたわら、大阪や東京で個展を開く二足のわらじ生活は多忙を極めた。制作が深夜におよび、床に寝転がったまま朝を迎えたことも。それでも続けていきたいと思ったのは、河野さんの作品を観て楽しんでくれる人たちがいたからだった。「観ていただいた方の感想も参考になります。それを自分のなかで消化し、新たな表現や作品づくりのパワーにもなるんです」と微笑む。

チャンスは逃したくない

「大阪でアートイベントが開催される機会は少ないので、チャンスは絶対逃したくなかった」という河野さんは、2006年秋のアートストリーム（湊町リバープレイス）に初出展して以来、毎年出展している。2008年には大阪芸術大学賞、2011年には大阪21世紀協会賞を受賞した。なかでも2009年は、来場者の目にとまったことがきっかけで、東洋紡グループ2012年企業カレンダーの制作依頼を受注。約2年間かけた大作は、『第63回全国カレンダー展・日本印刷産業連合会会長賞』を受賞した。2010年夏に会社を辞めてからは創作活動に専念。これまでの作品は50～60点を数える。

「いつも新しい手法や要素を取り入れたいと思いながら作っています。壁面いっぱいの大作や、待ち合わせのシンボルになるような作品、映像やアニメーション、大きな会場での原画展。やりたいことがいっぱいなんです」

笑顔で話す河野さんに、アーティストのほとばしる創作意欲と信念を感じた。

（ライター 三上祥弘）

夢の架け橋（2012年）

©Satomi

Dream Journey（2012年）

©Satomi

後援･協賛イベント

第31回現代水彩画展（公募）

絵画愛好者に水彩画の技法と表現の向上を促し、一般鑑賞者の役に立つことをめざす。優秀作品には現代水彩画大賞、大阪府知事賞、大阪市長賞、関西･大阪21世紀協会賞等を贈呈。◆7月11日（水）～16日（月）9:30～17:00／大阪市立美術館地下展覧会室／入場無料／問合せ:現代水彩画会･七野壽美☎･FAX06-6358-7827

創立40周年記念･日泰友好親善 第40回全日本きもの着付選手権大会

日本和装学園の地区大会を勝ち抜いた生徒が、きもの着付の日本一を目指す。同学園が友好親善を結んでいるタイ国より文化交流使節団を迎え、友好親善を深める記念イベントも開催。◆7月22日（日）10:00～16:00／よみうり文化ホール／入場無料※ただし、ご希望の方は下記までお申込み下さい。入場券をお送りします。／問合せ:日本和装学園総合本部☎06-6337-3071、FAX06-6337-3073

第42回全国高校ギター･マンドリンフェスティバル in すいた

全国より地区推薦された59校のギター･マンドリン合奏クラブが日頃の成果を発表。各演奏に対して講評し、クラブ活動の健全なあり方を指導。◆7月25日（水）11:00～18:30、26日（木）10:00～18:30／吹田市文化会館･メイシアター大ホール／入場無料／問合せ:全日本高等学校ギター･マンドリン音楽振興会事務局☎･FAX 06-6185-6531

第24回なにわ淀川花火大会

◆8月4日（土）10:00～23:00（花火打上19:50～20:40）●荒天の場合翌日に順延／上流･新淀川JR東海道線、下流･国道2号線淀川大橋／問合せ（7月1日～）:なにわ淀川花火大会事務局☎06-6307-5522、FAX06-6307-5521

第56回大阪薪能

上方芸能を代表する能楽の興隆と大阪における芸術文化の向上に貢献することを目的として、古式による薪能を開催。◆8月11日（土）～12日（日）17:30～20:30●雨天の場合13日（月）に順延／生國魂神社境内／前売3,000円、当日3,500円、学生2,000円／問合せ:生國魂神社☎06-6771-0002、FAX06-6771-0003

松尾塾子供歌舞伎25周年記念公演

伝統芸能の歌舞伎を通して、日本人の礼節と心を伝えようと開塾。4歳から15歳までの子供たちが熱演。◆8月25日（土）14:00開演、26日（日）12:00開演／国立文楽劇場／6,000円／問合せ:松尾塾子供歌舞伎☎03-3407-7778、FAX03-3407-5108

梅野由兵衛 聚楽町の場

第31回日現展

新しい感覚と国際的視野を広げる絵画を追求する、国際公募の美術展。◆10月16日（火）～21日（日）9:30～17:00／大阪市立美術館地下展覧会室／大人600円、学生500円／問合せ:日本現代美術協会事務局･石井東二☎･FAX072-277-1482

升の市

日本の「市」の起源といわれ、江戸時代には松尾芭蕉も見学に訪れた大阪の庶民の伝統行事を復活。◆10月17日（水）9:30～15:30／住吉公園内･松尾芭蕉句碑の周辺一帯／入場無料／問合せ:『升の市』実行委員会☎06-6782-6274、FAX06-6782-6277

※イベント内容の詳細については、各問合せ先にお問合せください。
※ここに紹介する以外にも、関西･大阪21世紀協会は多数のイベントなどを後援しています。

関西･大阪21世紀協会賛助会員へ入会のお願い
関西･大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会費（何口でも結構です）
■法人会員一口につき年会費10万円
■個人会員一口につき年会費1万円

特典
1.協会が発行する刊行物の配布
2.協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3.賛助会員の参考となる情報･資料の提供など

お問合せ（公財）関西･大阪21世紀協会　総務チーム　TEL.06-6942-2001 FAX.06-6942-5945

今年の夏は盛りだくさん！

大阪城サマーフェスティバル2012

大阪城周辺でさまざまなイベントが連打される“サマフェス（7～9月）”がパワーアップします。
今年の注目は新企画の『オープニングガラ』。毎年好評の『大阪城西の丸ステージウィーク』は、歌ありマーチングありの楽しいステージを11日間にわたりお届けします。

大阪の歴史・文化と未来をパフォーマンスで表現

オープニングガラ

7/26（木） 18:00～18:30（第1部）
18:30～20:00（第2部）

大阪城公園・大手門前広場（観覧無料）

「鎮魂そして希望」をテーマに、第1部は大阪府警察音楽隊による演奏を実施。第2部は、いいむろなおきによるパントマイムや四條畷学園高校吹奏楽部のマーチングをはじめ、オペラや合唱など、多彩なパフォーマンスで大阪の歴史・文化と未来を表現します。大震災の被災者、そして大阪城の御霊の鎮魂とともに、この城の景観の美しさや大阪の文化力を発信します。

主催：公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

四條畷学園高校吹奏楽部によるマーチング

美しい天守閣の夜景とともに楽しもう！

大阪城西の丸ステージウィーク

7/27（金）～8/5（日） ※開演時間は当協会ホームページに掲載予定です。

大阪城西の丸庭園特設ステージ

ライトアップされた大阪城天守閣をバックに、西の丸庭園で歌や吹奏楽演奏、アニメソングやコスプレなど、連日楽しいプログラムを繰り広げます。有名アニソンアーティストも多数出演。吹奏楽の夕べには、関西フィルハーモニーの藤岡幸夫さんも特別指揮で出演します。

桃知みなみも来るよ！

プログラムの一例 ※入場料はプログラムごとに異なります。

7/27（金）
李 広宏 コンサート

7/29（日）
アノインテッド・マス・クワイヤー コンサート（ゴスペル）

8/1（水）
吹奏楽の夕べ
特別指揮：藤岡幸夫（関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者）
出演：大阪市立扇町総合高校吹奏楽部（写真）他

8/3（金）～5（日）
nonstop アニソントレイン 祭

※開催日や出演者等は予定であり、予告なく変更することがあります。
※イベントの詳細は関西・大阪21世紀協会のホームページに掲載を予定しています。

PC http://www.osaka21.or.jp/

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会
ホームページ http://www.osaka21.or.jp
発行日／平成24年6月15日
発行・編集／公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階 TEL.06(6942)2001 FAX.06(6942)5945
発行人／佐々木洋三　編集統括／西村もゆる　編集協力／株式会社インサイト　印刷／株式会社NPCコーポレーション
本誌は再生紙を使用しています。